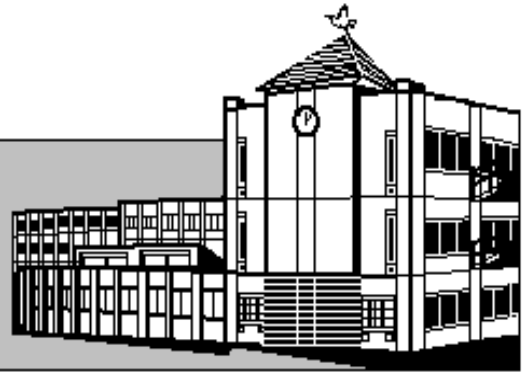


図書館だより



2000年度第2号 (2000年10月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

押入と抽斗^{ひきだし}

西村 秀雄

実家の屋号は「インキョ」という。本当は別の正式な(?)屋号があるのだが、そちらは誰も使わない。庄屋だった先祖が隠居したことによるそう。

だから当然、家紋のついた大きな蔵がある。鉄格子をはめ込んだ重い引き戸の向こうはまったくの別世界。鎮座しているのは数百年の時を越えて存在してきた品々。ひんやりとした空気が頬を染め抜く。

図書館は実家の蔵のようなものだと思っていた。地元国立大学の学部学生だった8年間は、特にそう思いこんでいた。他の学生よりもはるかに図書館を利用していたにもかかわらず。

アメリカ式の教育システムを誇る大学の大学院へ進んで、すべてが変わった。もちろん貴重な資料を含めて蔵書数は膨大。しかしそれらは死蔵されているのではない。本は書棚で利用者を今か今かと待ちかまえている。支援体制も充実。優秀なライブラリアンは生き生きとした表情で利用者をアシストしている。職員というより、まるで教えることが大好きな先生のように。そして何よりも、図書館全体が研究・学習のための有能な秘書といった感じである。

根本的に違うのだ。発想が。

知識を収めるのはあたり前。問題はどうかしたら図書館を積極的に利用してもらい、何かを生み出す手助けになれるか。だから図書館員は産婆さんのようなもの。

若い読者が土蔵になじみが薄ければ、押入で説明しよう。押入にむやみに物を詰め込んでも、どこに何を収納したかわからなくなってしまうことは良くあること。場合によっては詰め込みすぎで戸が壊れてしまうかもしれない。それよりも、本当に大切なことを机の抽斗から「引き出す」能力を伸ばすことの方が、長い目を見た場合にはずっと大切なのではないだろうか。特に旧来の価値が完全に崩壊し、自分の心の目で正しいもの、正しい未来を見抜くことを求められている現代においては。意外に思われるかもしれないが、激動するこの時代は、実はとても大きなチャンスを用意している。そのチャンスをつかみ、そして形あるものにするために、抽斗のような図書館は利用を待っている。

educate(教育する)という言葉は、ラテン語の educare に由来する。この言葉は本来「引き出す」という意味である。教育の基本は「教え込む」ものではないというわけだ。これはとても大切なこと。新しい発想の図書館と、教育の原点はまさに一致している。

暇ができたせいか、自分の発想がこのごろずいぶん変わったことに気づく。膨大な情報に呑み込まれるのではなく、抽斗のような新しい発想の図書館と同じように、自分からも情報発信。そのためにホームページ(http://www.page.sannet.ne.jp/h_nishi/)も開設した。受講生の利用も多い。

西村家の蔵のあり方も、きっと10代目でずいぶん変わることになるだろう。

国立国会図書館を訪問して

泉田ゆうこ(98E027)

8月5日に、若月忠信先生の「文学」の授業の一環として、国立国会図書館を訪れる旅があると聞いて参加させてもらった。朝一番の新幹線で出発して、東京駅から山手線で有楽町まで出て、地下鉄有楽町線に乗換え、永田町下車が最短距離であると教えられた。

国会図書館は日本国内で出版されたすべての本が収蔵されているため、私たちが普段利用している大学図書館や区市町村立図書館とは、いくらか違っていった。図書館を利用できる人は、20歳以上の人であることや、書物はすべて書庫に納められているため、まず請求票を受取り、自分の読みたい本の請求記号をコンピュータで調べて「資料請求票」に記入し、受付に申し込んでしばらく待つと、電光表示盤に利用カード番号が点灯され、係員が本を持ってきてくれることなどである。私が驚いたのは、国会図書館の本を借りて帰ることができないということだった。図書館とは本を貸し出すところと思っていただけに、衝撃をうけたし、他の図書館との一番の違いではないかと思った。本を持ち帰れないかわりに複写サービスがある。ただし、著作権を守るために、丁度半分までしかコピーは許可されない。

国立国会図書館に私は最も魅力を感じたのは、この図書館にはどんな本でも所蔵されているということである。すべての雑誌や漫画までも置いてあるのだ。私は読みたい本があって最寄りの図書館へ行ったが、その本が置いてなくてがっかりしたという経験を何度もしたことがあるだけに、そのように感じた。係員が本を持ってきてくれるまでに、およそ30分も待たされることを除けば、理想的な図書館であると思った。(ちなみに、本館6Fの食堂のパスタ系の定食は安くて美味、680円でアイスコーヒーまで付いた。)限られた時間内で、ゆっくりと閲覧室で読書を楽しんだり、すべての資料室をまわってみることができなかったのは、少し残念だったけれども、敬和学園大学の学生たちと共に国会図書館を訪れたことは、とてもよいひと夏の体験だった。こんな素晴らしい図書館が身近にあれば、たくさんの人々が利用するだろうし、もっと本を好きになる人々が増えるのではないかと思った。

新着図書

総記

Highsmith, Patricia. The Talented Mr. Ripley.
James, Henry. Collected Stories, Vol.1(1866-91).
James, Henry. Collected Stories, Vol.2(1892-1910).
Nabokov, Vladimir. Speak, Memory.
Pushkin, Alexander. The Collected Stories.
Goethe. J. W. von. The Sorrows of Young Werther.

哲学

キケロー 『キケロー選集2』
上智大学中世思想研究所編訳 『中世思想原典集成20』
カント 『カント全集9』
坂口ふみ他編 『宗教への問い4』
山折哲雄 『近代日本人の宗教意識』
M.クレッカー他編

『諸宗教の倫理学 - その教理と実生活第4巻』
野口鐵郎他編 『講座道教第4巻』

歴史

樺山鉉一他編 『岩波講座世界歴史別巻』
川田順造他編 『地域の世界史第4巻』
毎日新聞社編 『シリーズ20世紀の記憶3 - 3』
佐原真他
『ものがたり日本列島に生きた人たち』全5巻
大庭脩他 『日中文化交流史叢書1~10』
岡崎久彦他 『日本の失敗と成功』
児玉幸多監修 『北海道の歴史』
宮崎市定 『宮崎市定全集4』
武田幸男編新版 『世界各国史2』
田村実造編 『中国文明の歴史7』

生井英考『負けた戦争の記憶』
E・ウィリアムズ『コロンブスからカストロまで』全2巻
ピーエール・ミケル『ヨーロッパ最後の王たち』
高橋敏『国定忠治』

*Dyos, H.J., ed. The Victorian City, 2 vols.
Cross, Thomas.*

*The Autobiography of a Stage-Coachman, 3 vols.
Macaulay, Thomas Babington.*

The Works of Lord Macaulay, 8 vols.

社会科学

池田謙一『社会科学の理論とモデル5』
外務省編『外交青書2000-1(第43号)』
外務省編『外交青書2000-2(第43号)別冊』
大谷恭子他『若い女性の法律ガイド第3版』
塩野宏『公法と私法』
谷口知平他編『新版注釈民法(28)』
五十嵐清『契約と事情変更』
棚村政行『結婚の法律学』
N.カルドア『ポスト・ケインジアン叢書27』
伊東光晴『日本経済の変容』
矢野恒太記念会編『世界国勢図会00-01』
高梨庸雄他編『英語リーディング事典』
デュルケム『社会学的方法の規準』
海野道郎編『日本の階層システム2』
外尾健一『労働法入門第5版補訂版』
国際女性の地位協会編『女性関連法データブック』
尾木直樹『子どもの危機をどう見るか』
小宮山博仁『シリーズ教育の挑戦』
福井貞子『野良着』
千田稔他『アジア遊学19』
防衛庁編『防衛白書平成12年版』

芸術

副島弘道『運慶』
牟田和男『魔女裁判』

言語

菅山謙正編『現代言語学の射程』
吉村あき子『否定極性現象』
赤塚紀子他『日英語比較選書3・5・9』
Jaszczolt, K.M. ed.
The Pragmatics of Propositional Attitude Reports.
Berlin, Brent. Basic Color Terms.
Smith, Carlota S.
The Parameter of Aspect (Second Edition).
Jaszczolt, K.M.
Discourse, Beliefs, and Intentions.

*Brinton, Laurel. The Structure of Modern
English: A Linguistic Introduction.*

文学

半藤一利『永井荷風の昭和』
朝永振一郎他編『科学者の自由な楽園』
三谷栄一他校注・訳『新編日本古典文学全集17』
遠藤周作『遠藤周作文学全集第十五巻』
マルモンテル『インカ帝国の滅亡』
バーナード・クリック『ジョージ・オーウェル上・下』
McDonald, Robert L.
The Critical Response to Erskine Caldwell.
McDonald, Robert L., ed.
Erskine Caldwell: Selected Letters 1929-1955.

事務局より

- 国立国会図書館の利用法 -
(敬和学園大学の学生のために)

若月忠信先生の「文学」の講義を受けている学生諸君を中心に、社会人女性1名を含む10余名の「国立国会図書館探訪の旅」に、同行させていただいた。

国会図書館法の前文には、高邁な理想がかかげられているが、その中の「真理がわれらを自由にする」(The truth shall make you free.)という言葉は、ヨハネ福音書から引用したものである。本館2F中央出納台の上の壁面にはギリシャ語で聖書どおりの言葉が刻まれている。ギリシャ語のアレーセイヤ(真理)は、言葉や思想が事実と一致していること、より正確に言えば、隠れているものが現れて、人間に明示されることを意味する主知主義的な概念である。新約聖書の“真理”をさす語“アレーセイヤ”は、ヘブライ語の“エメト”に由来し、エメトは元来、契約における神の誠実を意味するものであった。旧約聖書の“エメト”(神の真実)から新約聖書の“アレーセイヤ”(真理)にかけては、倫理的概念はかなり変遷しているといわれている。(国立国会図書館月報、218号参照)

このことに関しては、元敬和学園大学教授・故安藤弘先生の精緻で新鮮な論攷があり、古ぼけた

壁面に刻まれたギリシャ文字を凝視しているうちに、先生の温顔が彷彿として、胸に熱きものがあつた。

国立国会図書館は 1948 年、国会議員や国民に対して図書館奉仕をするために設立。「納本制度」があるために、国内出版物を網羅的に収集・保存する機能を持つ。国会分館・上野図書館等 35 の分館がある。和書は約 515 万冊、洋書は約 215 万冊の蔵書数を誇る。他に国内逐次刊行物（雑誌約 103 千種、新聞約 7 千種）外国逐次刊行物（雑誌約 52 千種、新聞約 2 千種）や非図書資料を豊富に所蔵する。

次に、図書や雑誌の利用法について述べる。私たちが利用している大学図書館や公共図書館とは利用方法が少し異なっているので要注意。国会図書館館内へはコート、鞆等は持ち込めないので、ロッカーを利用する。（100 円投入）

「利用申込書」(APPLICATION FORM)を記入し、受付へ持参して、「利用カード」を受け取る。

請求書作成機に利用カードを挿入し、「資料請求票」の枚数ボタンを押し、必要な枚数を入手する。

「資料請求票」に請求番号、氏名、資料名、著者・編者名を記入。（和漢書は、コンピュータを利用して検索するが、1986 年以前の洋書は、カード検索である。）

請求票の記入完了後、受付カウンターに利用カードを示し、請求票を出す。

その時の込みぐあいにもよるが、30 分ほど待つと、電光表示盤に、利用カード番号が表示される。

利用カードをもって、受付カウンターで、係員から本を受け取る。

本は閲覧室へ持参して読む。

複写したい時は、「資料複写申込書」に記入して、複写カウンターにもっていく。物により、当日複写と後日複写の 2 種類がある。

（著作権法遵守の立場から、例えば 20 ページの論文は、10 ページ迄しか複写許可されない。）

本を返す時は、利用カードを持って、返却カウンターへ。

帰るときは、退館ゲートに利用カードを差し込む。ロッカーで自分の所持品を受け取る。

(100 円返却)

国会図書館へ出かける前に、敬和学園大学図書館のインターネット(Web-OPAC 一覧表示)で、各自の調べたいものを事前に検索してから行くことを勧める。

国会図書館と大学図書館（公共図書館）には図書館間貸出制度がある。県立図書館で、国会図書館から取り寄せてもらった稀覯書を手にしたことが幾度もあるが、館内閲覧のみで、持ち帰ることもコピーすることも許されない。

国会図書館まで行けない場合は、文献複写サービスを利用することができる。インターネット検索してから、敬和学園大学図書館で「資料複写依頼書」に記入して申し込む。

文献複写代金はモノクロで A4 と B4 サイズは 1 枚 30 円、A3 は 60 円。カラーで B4 と A3 とともに 1 枚 250 円。

梱包代金は 150 円。

郵送費用は実費で、50g までは 130 円。

「振込用紙」が入っているのでそれを利用すること。卒業論文やその他の研究に必要な文献を事前に検索してから、このサービスを活用することを期待する。

国会図書館の休館日は、日曜・祭日と第 2、4、5、の土曜日。第 1、3 土曜日は開館するが、その代わり次週の月曜日は休館となる。

利用者は満 20 歳以上という年齢制限がある。大学生、所属大学の図書館長の「紹介状」と学生証を持参すれば未成年でも入館を許可される。

（紹介状の有効期間は 10 日間。）

知りうるすべての情報を書いているうちに、すでに紙面も尽きかけてきた。本年 1 月の「図書館だより」、「ものはためしに国立国会図書館へ」をも参照し、本学在学中に少なくとも一度は国会図書館を訪問することを勧める。ひとたび本の虫に刺されると、本から逃れられない、という。本の虫に刺された状態とはいかに?を今説明するスペースはない。学生諸君の体験談を「図書館便り」に投稿して欲しいと思う。(kf)